

RUBeC 演習を終えて

須田 晃平

Kohei SUDA

機械システム工学専攻修士課程 1年

1. はじめに

私は、8月13日から29日の約2週間、アメリカ合衆国カリフォルニア州パークレー市の龍谷大学北米拠点（RUBeC）で開催された「RUBeC 演習」に参加しました。演習の主な内容は、自分の研究について英語で学術論文を書く「テクニカルライティング」と、英語で口頭発表をする「プレゼンテーション」でした。本演習の内容および演習を通して学んだことについて報告します。

2. 参加目的

私が RUBeC 演習に参加した目的は、英語への苦手意識をなくし、積極的に発言できるようになることです。今まで長い期間英語を学んできましたが、会話をする機会がほとんどありませんでした。そのため、英語で話そうとすると緊張して全く話せないということがこれまでに多々ありました。そこで、英語圏に赴き、その環境で生活することで英語のスキルを伸ばそうと考えました。また、将来を見据え、異文化を知り、肌で感じることも目的の1つです。

3. 授業内容

3.1 テクニカルライティング

水曜日を除く平日の午前中はテクニカルライティングを行いました。事前に作成しておいた自分の研究文章の訂正のほか、冠詞の使い方や熟語など英文文章を作成するうえで基本となることを重点的に講義していただきました。

冠詞に関して、今までそれほど重要視せずに文章を作成していましたが、可算と不可算の区別だけでなく、対象物が文章中において既知のものか未知の

ものかを区別するという、とても重要な役割を果たしていることを知りました。これら学んだことを復習しつつ、即座に自分の研究文章にフィードバックすることができる非常によいプログラムでした。

また、研究文章の内容の訂正に関して、講師の方は専門家ではないため、専門用語など理解できないことがありました。そういった用語の説明も英語で行わなければならず、とても難しかったです。図を用いて説明するなど工夫して何とか伝えることができました。その上で、専門家でなくても理解できる言い回しを考えるなど、やり取りを繰り返すことで研究文章を書き上げました。

3.2 プレゼンテーション

午後からは、プレゼンテーションを行いました。発音やイントネーションを中心にアイコンタクトやジェスチャーについても講義を受け、簡単な自己紹介や研究の概要について発表しました。もともと人前での発表は苦手で、また慣れない英語での発表ということもあり、最初は頭が真っ白になりほとんど発言できませんでした。最終日には研究内容についてパワーポイントを用いて発表しました。完璧とは言えませんが、自分の研究を自分の言葉で伝えることができ、達成感がありました。

4. 企業見学および大学訪問

4.1 Thermal Technology LLC

8月17日は、Thermal Technology 社に企業見学に行きました。この会社は、高温炉や真空炉、SPS（放電プラズマ焼結）装置といった高度な熱加工システムの製造を行っている会社でした。設計、製造、設置まですべて自社で行うなど、市場マーケティングにおける戦略を学びました。

4.2 UC Davis

8月24日は、UC Davis に訪問しました。Davis 校はとにかく広く、1つの町のような感じです。ここでは、Davis 校の教授による大学紹介およびカリキュ

ラムの説明がありました。工学部の大学院生のうち、65%が博士課程であること、また40%が国外の学生であることなど、日本とは大きく構成が異なることに驚きました。グローバル化について、日本ではあまり考えませんでした。同世代で世界に目を向けている人が大勢いる実状をみて、かなりの出遅れを感じ、自分の将来に危機感を覚えました。また、学内ですれ違う学生たちを見ているとエネルギーで、日本の大学とは違う印象を受けました。

5. 海外での生活

RUBeC 演習中は、現地でホームステイをしました。これは貴重な体験であると同時に、必然的にホストファミリーとコミュニケーションをはかることになるため、英語を学び、文化を知る上でとてもためになるものでした。最初のころは、英語がほとんど聞き取れなかったため会話が成立せず、またホストファミリーの方に苦笑いされるなど、2週間やっていけるか不安でしたが、日が経つにつれて聞き取れるようになりました。それに伴い、会話をする機会が増え、英語で物事を伝えることが楽しく感じるようになりました。

町に出れば様々な人種の人がおり、日本ではあまり見ない光景でした。また、ホームレスが多く、日本とは異なる雰囲気を感じました。話しかけられたときは少し焦りましたが、今思えば貴重な体験だったと思います。

6. おわりに

RUBeC 演習は、約2週間という短い期間であり、思い通りに英語を話せるようにはなりませんでし



図1 プレゼンテーションの様子



図2 UC Davis での講演の様子

た。しかし、このプログラムを通してより一層英語の必要性を感じました。自分の考えを自分の言葉で説明することの大切さと楽しさ、またその難しさを実感したためです。英語への苦手意識を完全には払拭することはできませんでしたが、英語に対する考え方は大きく変化したのは確かです。今回の経験を今後の人生に役立てていきたいと考えています。